

平成17～18年度 東西学術研究所研究報告書

Study report for the fiscal year of 2005 to 2006
The Institute of Oriental and Occidental Studies

注 (1) 研究班のまとめ、(2) 個別報告書の順に記載しています。

1 大阪・長崎研究班 (主幹) 藪田 貫

(1) 班別研究報告書

江戸—明治期、長崎における日中交流

China-Japan Exchanges at Nagasaki in the Edo and Meiji Era

第1年度における本班の研究は、おもに次の三つの方向で展開し、後述のような成果があった。

第一に、若木太一が中心となって進める長崎聖堂関係の「閑齋日乗」の読解である。「閑齋日乗」は長崎聖堂の記録として貴重なもので、在留唐人の動向はもちろん、幕府関係者ならびに大坂など長崎以外からの来訪者の記録もあり、江戸後期の長崎の学術文化的動向を捉える上できわめて有力な資料であることが判明した。第2年度には、藪田貫も加わり、読解作業をスピードアップし、公刊に努める。関連して長崎唐人屋敷に関する建築学的な研究が永井規夫によって進められているが、まとまった成果になっていない。

第二に、藪田貫が准研究員吉川潤とともに進める文学部古文書室津田秀夫文庫所蔵長崎関係文書の調査と目録化で、年度末に完成したので、紀要に掲載した。

第三に、明治期の中国知識人と日本知識人の交流に関する陶徳民の研究であるが、これについては陶が、平成18年後期にサバティカル休暇を得たことも手伝い、大きな成果として纏まった。

研究例会発表実績

☆平成17年10月28日

陶 徳民「王韜(1828-1897)における儒教とキリスト教の相克」

若木 太一「『閑齋日乗』の人物たち—交遊録—」

☆平成18年6月23日

陶 徳民「1903年勧業博覧会に来遊した張審と大阪の文士たち—翰墨林書局版『癸

卯東遊日記』を手掛かりに—」

吉川 潤「津田文庫蔵伊東家文書にみる幕末期の長崎貿易」

(2) 個別研究報告書

江戸時代の大阪—長崎人物交流史

Human Exchanges Between Nagasaki
and Osaka in Tokugawa Japan

藪田 貫

江戸時代、唯一の貿易港であった長崎は、そこで日中・日蘭貿易の展開を通じて、大坂と深く繋がっていた。主要輸出品である銅をめぐる関係、主要輸入品である薬種をめぐる関係がその象徴であり、それら社会経済史的側面についての研究業績は多数ある。

それに対しこの研究では、長崎—大坂間の人物の交流を通して、両者の関係を探ろうとするものである。そのために予定した研究は第1に、人物の交流を定点観測できる長崎側と大坂側の基本資料の発掘である。長崎側については共同研究員若木太一が担当し、大坂側を藪田貫が担当した。その結果、長崎側の「閑齋日乗」に應ずるものとして、大坂町奉行新見正路日記ならびに同久須美祐明日記、さらに幕末期の広瀬旭荘日記が大坂側の資料として可能性が高いことが分かった。

すでに若木は「閑齋日乗」の読解を進め、例会で発表しているが、藪田も新見・久須美日記の読解を進めており、平成19年度中には一部公刊の予定である。ただし「閑齋日乗」は大部のため、若木一人では読解の完了は難しいので、次年度以降、藪田も協力することとなった。

いまひとつは具体的な交流を知る作業として、准研究員吉川潤を指導・協力して文学部古文書室所蔵津田秀夫文庫のなかの長崎会所元役人伊東家にかか

る文書の整理と目録化を行った。

長崎・大阪をハブとする清末の日中経済文化交流

Sino-Japanese Economic and Cultural Exchanges with
Nagasaki and Osaka as the Hub in the Late Qing Period

陶 徳民

本研究は清末の日中経済文化交流の実態を、1903年大阪で開催された第五回内国勲業博覧会を来観した状元出身の実業家、張謇の東游日記、および内藤文庫で見つけた、湖南・西村天因など大阪朝日新聞の論説記者宛に送った手紙や贈った記念写真にもとづいて分析したものである。

本研究は次のような特色を有する。

まず、文献資料と実物史料との照合によって、研究対象の諸相を確実に捉えている。

そして、張謇の来訪の交通経路および調査研究の対象機関から、長崎をハブとする清末の日中間の交通網および大阪をハブとする東アジア経済圏の地位を浮き彫りにした。

文化面において、湖南・天因および泊園の南岳と張謇との付き合いの過程を通じて、清末・明治後期における文士たちの伝統的交流形式（漢詩による唱和など）および近代的交流内容（近代商工業・学校制度の導入および儒教精神の堅持）を明らかにした。

言語交流史の研究

Researches on interaction between Japanese and Chinese

若木 太一

日中の言語文化の交流の諸相について研究を進めた。芭蕉については『莊子』の思想摂取時代の「野ざらし紀行」「笈の小文」の紀行文論から、晩年の「おくのほそ道」にいたる変化を中国文学からの影響を探った。

また、長崎聖堂の創建以来の歴史的変遷を追跡し、興福寺に保存されている中島聖堂の遺構を調査した。また歴代創始者である向井元升の著作の分析と活動を後付け、神道と儒学の折衷学を唱える人物であることを考証した。

2 日本美術工芸研究班 (主幹) 中谷 伸生

(1) 班別研究報告書

日本を中心とする東西の図画像

The eastern and western Iconography with Japan as center

本研究班では、研究員の中谷伸生が、「江戸時代の絵画と明清の絵画」と題して、江戸時代の狩野派や円山派、四条派、そして文人画などに見られる中国絵画の影響を中心に、日本絵画と中国絵画の比較研究を行った。詳細を述べると、①京都の狩野派第9代の狩野永岳の障壁画や屏風絵に見られる中国趣味、②近代大阪の画家の矢野橋村筆『青飛白走帖』に見られる東アジアの文人趣味、③関西大学図書館所蔵の大口金谷編『爾雅釈草図』に見られる東アジアの本草学と博物学の研究、などである。日本美術を東アジア美術史の一つの柱として研究した。また、研究員の山本卓が、「近世上方の絵本（版本）の流れから見る絵本読本の成立」という研究題目の下、大坂の出版書肆（版元）勝尾屋六兵衛のプロデューサーとしての活躍を浮き彫りにし、文運漸興以降の上方における出版のあり方を問いかける研究を進めた。さらに、研究員の長谷洋一が、「日本の仏像彫刻と朝鮮半島及び中国」という研究課題の下、京都仏師（七条仏師、町仏師）、江戸・大坂仏師、地元仏師（奈良、博多、長崎）の分類を用いて、近世唐様彫刻を考察し、禅宗寺院における明末彫刻の展開とその特質について研究を行った。

研究例会発表実績

☆平成17年度

平成17年10月21日

中谷伸生「日本近世近代絵画と大阪画壇の再評価について」

平成18年6月16日

長谷洋一「近世唐様彫刻の種々相」

中谷伸生「大阪の文人画と江戸狩野

一岡倉天心が評価したもの・しなかったもの」

刊行物

☆『東西学術研究所紀要』第39輯

平成18年4月1日刊行

中谷伸生「東アジアの本草学と博物学的美術史的
一考察(上)―大口金谷編『爾雅釈草
図』(関西大学図書館蔵)について―」

その他の活動

〔著書〕

中谷伸生『関西大学創立120周年記念・大坂画壇
の絵画―文人画・戯画から長崎派・写生画へ』

関西大学図書館 平成18年10月15日刊行

〔論文〕

『美術フォーラム21』13号

平成18年4月5日刊行

中谷伸生(論文)「岡倉天心が評価したもの・
しなかったもの―江戸狩野と大坂の文人画―」

『伏見稲荷大社「朱」』50号

平成19年2月17日刊行

中谷伸生(論文)「菅橋彦、奥谷秋石、阪正臣、
山本行範による合作<きつねよめいりの巻>」

『関西大学博物館紀要』13号

平成19年3月31日刊行

中谷伸生(論文)「大阪の文人画家・矢野橋村
―『青飛白走帖』に見られる東アジアの文人
趣味」

『アジア文化交流研究』2号

平成19年3月31日刊行

中谷伸生(論文)「大坂画壇と長崎、そして中
国―大坂画壇の再評価から東アジア美術史の
構想へ―」

『国文学』91号

関西大学国文学会 平成19年3月1日刊行

山本 卓(論文)「都の錦作片仮名本『内侍所』
筆蹟考」

『ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集』4

東大寺 平成18年12月9日刊行

長谷洋一(論文)「東大寺の近世仏教彫刻―大
仏開眼以後―」

『日本史の研究』216

山川出版社 平成19年3月20日刊行

長谷洋一(論文)「講座 仏教美術 近世の仏

教美術―日本彫刻史のなかの円空―」

〔資料紹介・報告等〕

『美術フォーラム21』13号

平成18年4月5日刊行

中谷伸生(資料紹介)「伝狩野永岳《琴棋書画図》
幕末京狩野の光芒」

『NOCHS occasional paper』2

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

平成18年3月31日刊行

長谷洋一(報告)「渡唐天神図について」

『阡陵』52 関西大学博物館

平成18年3月31日刊行

長谷洋一(報告)「東大寺戒壇院の鑑真和上像
―近世模刻像の一作例―

長谷洋一(報告)『道明寺天満宮宝物選』(なにわ・
大阪文化遺産叢書4)

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

平成19年3月31日刊行

〔学会発表〕

・中谷伸生「耳鳥斎の版本と肉筆画」(実践女子大
学「絵入本ワークショップⅡ」)平成18年9月18日

・中谷伸生「大坂画壇と中国絵画―東アジア美術
史の構想へ―」(日中交流史研究会、於：中国・
浙江工商大学日本研究所)

・山本 卓「都の錦自筆『内侍所』攷」(日本近世
文学会、於：専修大学)平成18年6月10日

・山本 卓「『絵本宇多源氏』をめぐって―絵本読
本誕生の頃」(国文学研究資料館プロジェクト研究
例会、於：国文学研究資料館)平成19年1月8日
〔講演〕

・中谷伸生「英国で脚光を浴びた大坂の絵画」(於：
芦屋市立美術博物館)平成18年10月14日

・中谷伸生「関西大学創立120周年記念・大坂画壇の
絵画」(於：関西大学図書館)平成18年11月16日

・長谷洋一「泉佐野の宗教美術」(いずみさの歴史
セミナー、於：歴史館いずみさの)

(2) 個別研究報告書

江戸時代の絵画と明清の絵画

Paintings in Edo period, the Ming dynasty, and the Ch'ing dynasty

中谷 伸生

平成17～18年度の中、平成17年度においては江戸時代にける大坂と京の絵画、とりわけ大坂の戯画作者の耳鳥斎や岡田半江、京都の山口雪溪や狩野典信、加えて大口金谷編集の『爾雅釈草図』に登場する岸派、原派、狩野派、四条派、円山派、復古大和絵派の画家たちについて研究を行った。同時にそれらの画家と中国の明清の画家の絵画との比較などにも言及し、「江戸時代の絵画と明清の絵画」という研究題目の課題に取り組み、18世紀から19世紀にかけての日中絵画の交流を扱った。

平成18年度においては、近代美術史の形成に大きな力を注いだ明治の官僚岡倉天心の事績に触れながら、岡倉天心の日本美術史及び美術批評を研究し、大坂画壇の再評価について問い直し、東アジア美術史の構想について論じた。その際、大坂、長崎、中国を文化交流の重要な場所として設定し、従来採り上げられなかった大坂画壇の中、長崎派と文人画派について新知見を披露するように努めた。

両年度にわたって、木村兼葭堂を中心とする大坂画壇、菅橋彦を中心とする近代大阪の美術界を網羅的に採り上げ、大坂画壇と中国との結びつきの強さを指摘した。こうした研究によって、これまで軽視されてきた大坂画壇の画家たちの作品群の研究の重要性を明らかにし、未紹介資料を多数紹介することで、この領域に寄与した。これからの日本美術史が、一国（日本）内部の問題に限定されることなく、広く東アジア美術史の研究へと向かうことを示唆した。

近世上方の絵本(版本)の流れから見る絵本読本の成立

Development of picture reading books in view
of modern Osaka picture books

山本 卓

絵本読本は文運東漸以降も上方において新作・出版し続けられたジャンルである。上方読本の本流で

あり、深く強固に根付いた上方文藝の様式のひとつといえるのである。今回の研究では、その「絵本」としての側面に留意して、絵本読本の成立を再検討した。

絵本読本の前史としては、『都名所図会』などの名所図会の盛行が指摘されているが、本研究の成果としては、まず『絵本前太平記』などの軍記の絵本を指摘した。

さらに、その源流として、『絵本故事談』や橘守国などの故事絵本・絵手本の存在などが留意されるのである。そしてそこには、元禄期の故事絵本『絵本宝鑑』を嚆矢とする脈々たる流れが認められるのである。

すなわち、上方には、故事・歴史などの「教養」の絵本化という伝統を指摘しうるのである。

そのような、史的流れの中で、絵本読本の初作『絵本太閤記』という作品の企画・案出にあたっては、勝尾屋六兵衛という大坂の出版書肆（版元）のプロデューサーとしての役割が目される。大阪本屋仲間をたどっていくと、その様相が窺い知れる。しかも、勝尾屋六兵衛は、出版法度の圧力の中で相当の骨折りをして、苦勞の末にようやく出版に漕ぎ着けたのである。すなわち、絵本読本『絵本太閤記』の開版は、徳川家や大名家・武家などの祖先の話の出版を禁ずる当時の出版法に抵触するのである。勝尾屋六兵衛は、大阪本屋仲間行司による改め（検閲）制度のもとで、行事との交渉や作品の本文にも改変を加えることまでして、何とか出版許可を得て、新しいジャンルを創出したのである。

文化の創造者のひとり、あるいはプロデューサーとして、出版書肆（版元）の役割も見直す必要があるだろう。

日本の仏像彫刻と朝鮮半島及び中国

Japanese Buddhist sculpture
and Korean peninsula and China

長谷 洋一

近世造像環境として京都仏師（七条仏師、町仏師）、江戸・大坂仏師、地元仏師（奈良、博多、長崎）と分けることが出来、その上で近世唐様彫刻を考

てみると、長崎在留の唐人を主な受容層とする長崎での造像活動（仏工、作品）と京都での造像活動を比較するとその様相が異なる。

長崎の唐様彫刻は、長崎在住の中国人仏工が活動を停滞する延宝～貞享年間に開始される。この時期は各地での地元仏師の勃興期とも合致するが、唐人屋敷が設置され、在留唐人の行動の自由が制限されたこととも関係している。長崎仏師である山口平内の場合、長崎での明末彫刻を直模する造形姿勢で元禄13年頃までの活動が天草地方で確認でき、地元仏師としての地域的に限定された活動圏で唐様彫刻が分布していることが知られた。この時期はキリシタン禁令とともに禅宗系寺院の拡張とともに広まり、18世紀後半には収束する。以後、「唐様」彫刻が放棄され、通常みる地元仏師の傾向—京都・大坂仏師への追随—にしたがっている。

京都の唐様彫刻は、万治3年（1660）長崎からの范道生による萬福寺造像への参画を契機とする。京都仏師の友山、香甫、康祐、忠圓は、范道生離山以後も造像に携わり、「唐様」を撰取する。従って萬福寺像—范道生の個性—唐様彫刻の規範とみなすことができる。萬福寺像の直模も認められる一方で、遅くとも元禄年間には「唐様」の造形要素を採用しながら「唐様」の和様化へと導かれ、その傾向は大坂・江戸仏師の作品においても認めることができる。

以上のことから唐様彫刻の展開は、明末彫刻のもつ濃厚な中国的色彩が薄められ、「和様化」していく過程でもあったことが判明した。

3 日中交渉史研究班 (主幹) 藤田 高夫

(1) 班別研究報告書

中国文化の伝播と変容

Transmission and transformation of Chinese culture

本研究班は、日中文化交渉を総体として扱うのではなく、いくつかの局面に切り分けて探求することを目的としている。従来の研究では、中国文化が本来持っていた地域性や、文化内容による特殊性への

目配りが十分ではなかった。本研究では、中国沿海地方の地域性、仏教文化の特殊性、伝播媒介としての海上交通の環境に加え、古代日本、琉球という受容する側の条件の違いも視野に入れて、各局面の歴史事例を持ちよりながら、日中文化交渉史研究の新たな方法論を提言することを目指した。

共同研究の進展にともない、班員各自の設定したテーマに基づく研究成果は着実に蓄積され、そのいくつかは単行本として刊行された。同時に、「日中交渉史」という学問分野全体の方法的未成熟が顕在化し、それが次の課題として浮上した。本研究班の班員は、すべてが科学研究費補助金・基盤研究(A)のメンバーであり、大多数が学術フロンティア推進事業・アジア文化交流研究センターの研究者であることから、本研究班の抽出した課題は、そちらでさらに深化されることとなる。

研究例会発表実績

☆平成18年1月23日

藤田 高夫「中国文化の伝播、変容と環流—中国沿海地方と文化交流史研究—」

☆平成18年7月14日

藤田 高夫「日中交渉史における時代区分の可能性」

☆平成19年2月10日

宮嶋 純子「出家者を表す訳語とその展開—僧・沙門を中心に—」

刊行物

☆平成17年度

東西学術研究所紀要 第39輯

松浦 章著「清国輪船招商局汽船の日本航行」

東西学術研究所研究叢刊26

藤善 眞澄著『参天台五臺山記の研究』

☆平成18年度

東西学術研究所資料集刊 13-7

松浦 章著『文政十年土佐漂着江南商船蔣元利資料—江戸時代漂着唐船資料集七一』

その他

・科学研究費補助金

基盤研究(A)「中国文化の伝播、変容と環流—中国沿海地域と日本」による研究活動の拡大と深化

- 上記科研を利用したの国際シンポジウム「東アジアの国際関係と日中交渉」の開催
(平成19年1月27日・28日)

(2) 個別研究報告書

中国沿海文化圏の形成

Formation of the cultural blocs in coastal China

藤田 高夫

日中文化交流を考える際の方法上の問題点の一つに、「中国」を一個の文化的総体としてアприオリにとらえ、その上に立って日中文化交流を議論するという点がある。本研究は、逆に、中国文化を多様な地域文化の複合体と仮定し、そうした地域文化のどの部分が日本に受容されたのか、という視点の可能性を追求するものである。

そこで第一に考えるべきは、かかる地域文化がいつ頃、どのような形で形成されたのか、という問題である。文化の地域性については、すでに中国でも「齊魯文化」「浙江文化」など、地域名を冠した研究の枠組みが設定されつつあるが、それらはいずれも他国との文化交流を視野に入れたものではなく、中国内部での地域的独自性の検出をめざすものであり、特に日本への伝播と受容を考える本研究班の課題には、裨益するところがない。

さらに第二の問題として、日中文化交流の現実の担い手が、中国のどの地域との交渉を持ったのかを確定する必要がある。ところが、その対象地域は、時代によって変化し、それが日本にもたらされる中国文化を規定していることが判明する。

したがって、本研究では、日中文化交流を研究する上での土台となるべき時代区分と、それと整合する形での地域区分の構築を目的とした。地域区分については、なお未整理の部分が残るが、時代区分については、日本史・中国史という国別の枠組みを超えた時代区分設定を提唱し、新たな文化交渉史研究の基礎となる研究視点を提示した。

琉球における中国文化の受容

Acceptance of Chinese culture in Ryukyu

高橋 誠一

琉球と日本の歴史地理学的実体の解明のために、現地調査を継続している。関西大学地理学専修の大学院生・学部学生による鹿児島県大島郡与論町における総合調査は、自然・文化民俗・農業・観光・交通にわたるもので、2006年6月・10月に現地調査を実施、この成果は本年度中に公刊予定である。また成果の一部は2007年1月に現地において発表した。さらに琉球に関しては、2006年8月に沖縄県八重山郡与那国町、9月に沖縄県国頭郡今帰仁村において歴史地理学的調査を行った。また2007年2月に開催した共同国際研究集会はベトナムの研究者3名を含んで約80名の参加を得たが、研究集会にさきだつて沖縄県中・北部地域を現地巡検した。

古代日本における中国文化の受容

Acceptance of Chinese culture in ancient Japan

西本 昌弘

八〇四年に入唐留学して長安の青龍寺の恵果から灌頂を授かり、密教の奥義を会得して八〇六年に帰国した空海が、平安時代初期の日本にどのようにして真言密教を定着させたかを、主として天皇・貴族層に対する灌頂授与の事実をもとに考察した。

第一に、空海が弘仁一三年（八二二）に平城上皇に灌頂を授与したことは、従来から史実かどうか疑問視されているが、『平安城太上天皇灌頂文』の記載、正倉院北倉出納文書の記載、それに最近紹介された正倉院玻璃装仮整理文書断片の記載などから、平城上皇が空海から灌頂を受法したことは、歴史的事実として認定しようと結論づけた。

第二に、空海が弘仁一四年（八二三）に嵯峨天皇に灌頂を受けたことが史実かどうかを検討した。承和三年（八三六）に空海の弟子実恵が唐の青龍寺の義明に宛てた書状の記載、『嵯峨太上天皇灌頂文』の記載などから、嵯峨天皇が空海から灌頂を受法した可能性はきわめて高いと考えた。

第三に、空海の書簡集である『高野雜筆集』を分

析し、嵯峨天皇の側近である藤原三守に宛てた空海書状が三通存在することを明らかにした。空海は三守が参議に昇進した弘仁七年（八一六）一〇月頃には、三守と親密な関係を築いており、こうした嵯峨側近との交流が上皇・天皇の灌頂受法につながり、ひいては朝廷が空海の密教宣布を支援する機縁となったことを論じた。

日中交渉における海上交通

The Maritime Route in Shino-Japanese Relations

松浦 章

近代日中交渉史の課題として、日中間の汽船航運の問題を焦点化して研究した。既に『近代日本中国台湾航路の研究』（清文堂、2005年6月）を刊行し、中国側の事情を探る意味で清国の輪船招商局からの視点で日中関係を考えた。

19末の東アジアにおいて巨大汽船会社として存在したのは、清国の輪船招商局と日本郵船会社とであった。この両会社は、東アジアに進出してきた欧米の汽船会社に遅れ設立された後発の汽船会社で、いずれも清国政府、日本政府の後援を得て有数の企業として成長してきた。

日本郵船会社の前身であった三菱汽船會社は、日本からの最初の海外航路として、横濱、神戸等を経由して上海への航路を開設する。その開設の趣旨が“The North-China Herald”、No.406、1875年（明治8、光緒元）2月18日付の通信欄に、上海での代理店となったコーニングから2月13日の日付で三菱商會の名で掲載されている。三菱汽船会社はこれ以降、毎週汽船を運航し、それは明治18年（光緒十一、1885）に、共同運輸会社とともに合併された新会社日本郵船会社に、この航路は引き継がれていくのである。

清末に設立された中国の巨大汽船会社輪船招商局は、明治6年（1873）には伊敦（Aden）号、明治10年（1877）には大有（Tahyew）号、明治15年（1882）には懷遠（Hwaiyuen）号、そして明治19年（1886）には2隻の海定（Hae-ting）号、致遠（Chi-yen）号を使用して日本への航行を試みたが、いずれも定期運航にはほど遠い断続的な航行であったことが知ら

れる。さらに明治19年の海定号、致遠号の来航に際し見られたように、日本側の抵抗にあい、想定していた運航状況には到らなかった。同論文は紀要39輯に報告した。

さらに個別研究題目「日中交渉における海上交通」に関連する資料として、日本に漂着した中国商船の史料は、紀要第38輯に報告し、さらに清代帆船の航運史料を収集している。その一部は『東西学術研究所2005/2006年研究成果報告』（仮称）に一部収録する予定である。

日中交渉における仏教文化

Influence of Buddhist culture in China-Japan relationship

藤善 眞澄

入宋僧成尋の『參天台五臺山記』8巻の訳注を進めながら、これと関係する日中間の諸問題ならびに宋代における仏教事情の解明を試みたのが研究叢刊の一書としてまとめた研究篇である。従来本書を資料に採用する場合、ともすれば日中関係史に終始するか、成尋と彼の遊記そのものに主眼が置かれがちであったが、本書を通じて当時の中国事情を眺める中国側の史料として扱うことを志した点に特色がある。宋代に至るまでの日中関係史は、仏教、仏僧を除いては語れず、その意味からも貴重な内容を備える本書の訳注は是非とも完成せねばならない。

4 思想・儀礼研究班 (主幹) 吾妻 重二

(1) 班別研究報告書

東アジアにおける儒教儀礼の研究

Research on Confucianism Rituals in East Asia

吾妻重二研究員（当研究班主幹）は儒教儀礼をテーマとして調査と研究を行ない、「儒教祭祀の範囲について」、「江戸時代の儒教葬祭儀礼—池田光政・徳川光圀と『家礼』」を発表した。橋本敬造研究員は清朝に起こった典制問題に焦点をあて、「天学と西学：典制問題の初期的展開」と題して発表し、西洋と中国の儀礼交渉について研究を進めた。二階堂

善弘研究員は、道教研究者としての立場から「仏教・道教と民間信仰の祭祀について」、「海神・伽藍神としての招宝七郎大権修利」、「祠山張大帝考—伽藍神としての張大帝—」の発表を行なった。また、京都府立大学の中純夫委嘱研究員は「王守仁の文廟従祀問題—中国と朝鮮における陽明学観—」と題して発表し、朝鮮における儒教儀礼の一端を解明した。

本研究班は関西大学アジア文化交流研究センター（CSAC）と連携をとりつつ、「東アジアにおける儒教儀礼」を儒教内部のみならず、キリスト教信仰や道教・仏教・民間信仰の側からも照射してきた。さらに中国・西洋・日本・朝鮮などの儀礼を相互に比較することで、東アジア文化の複合的様相の解明にとりくむことができたといえる。

このほか、当研究班では平成17年12月9日に武漢大学哲学学院の蕭漢明教授を招聘講演者として迎え、「五行説の生成、発展とその思惟的特徴」と題する発表を行なっていただいた（通訳は本学大学院生の氷野善寛氏）。

研究例会発表実績

☆平成17年5月27日

吾妻 重二「儒教祭祀の範囲について」

（関西大学CSAC兼任研究員として）

☆平成17年6月24日

二階堂善弘「仏教・道教と民間信仰の祭祀について」

（関西大学CSAC兼任研究員として）

☆平成17年10月21日

中 純夫「王守仁の文廟従祀問題—中国と朝鮮における陽明学観—」

☆平成18年1月27日

橋本 敬造「天学と西学：典礼問題の初期的展開」

（関西大学CSAC兼任研究員として）

☆平成18年10月13日

二階堂善弘「海神・伽藍神としての招宝七郎大権修利」

（関西大学CSAC兼任研究員として）

☆平成18年12月1日

吾妻 重二「江戸時代の儒教葬祭儀礼—池田光政・徳川光圀と『家礼』」

（関西大学CSAC兼任研究員として）

☆平成19年1月12日

二階堂善弘「祠山張大帝考—伽藍神としての張大帝—」

刊行物

（研究班としての出版物）『東西学術研究所紀要』他
☆平成17年度

二階堂善弘「漳州の寺廟について」

『東西学術研究所紀要』第39輯

☆平成18年度

二階堂善弘「道教・民間信仰における元帥神の変容」
東西学術研究所研究叢刊27

中 純夫「信齋李令翊と椒園李忠翊—初期江華学派における陽明学受容—」

『東西学術研究所紀要』第40輯

(2) 個別研究報告書

東アジアにおける儒教儀礼の調査と研究

Investigation and Research on Confucianism Rituals in East Asia

吾妻 重二

「東アジアにおける儒教儀礼の調査と研究」というテーマのもとに諸活動を行なった。

調査としてはアジア文化交流研究センター（CSAC）の兼任研究員として、韓国ソウル、岡山県閑谷学校、茨城県水戸に赴き、現在もなお実施されている儒教儀礼について現地調査を行なった。ソウル大学の琴章泰教授を中心とする儀礼研究者とも座談会を開くこともできた。その報告は次のとおりである。

1. 「ソウルの宗廟大祭および儒教儀礼関連施設の調査」『還流』第1号（関西大学アジア文化交流研究センター、2005.8.31）
2. 「閑谷学校釈菜の参観」『還流』第2号（同上、2006.1.31）
3. 「水戸徳川家葬祭儀礼の調査」『還流』第3号（同上、2006.7.31）
4. 「ソウル大学奎章閣韓国学研究院グループとの座談会」『還流』第4号（同上、2006.12.25）

また、研究例会のほか、付設のアジア文化交流研究センター（CSAC）において、本研究所の兼任研究員として研究発表を2度行なった。

1. 「儒教祭祀の範囲について」関西大学CSAC思想・儀礼研究班第2回研究会
2. 「江戸時代の儒教葬祭儀礼—池田光政・徳川光圀と『家礼』」関西大学CSAC思想・儀礼研究班第5回研究集会

このほかに中国武漢大学、東京大学、名古屋大学、ソウル漢陽大学、関西大学創立120周年記念シンポジウムなどにおいて発表もしくは講演を行なった。

これらの調査や研究発表・講演は、従来十分に考察されてこなかった儒教儀礼の様相を明らかにする目的で行なったものである。儒教の研究はこれまで哲学思想の面に関心が集中しており、儀礼や祭祀の面については明らかでない点が多い。以上の研究により、儒教をめぐる未開拓分野を発掘し、東アジア地域の文化の解明につながる成果をあげることができた。

中国道教・民間信仰の祭祀と儒教

On Relationship of Taoism, Chinese Popular Religion Ritual and Confucianism

二階堂善弘

中国の道教・民間信仰と儒教の関係について、祭祀・祭神を中心に考察した。まず論文「漳州の寺廟について」(『関西大学東西学術研究所紀要』第39号)では、福建漳州における寺廟の状況について、現地調査に基づき検討した。南宋期の儒者である陳淳の見解をもとに、東岳大帝廟や媽祖廟・閩帝廟など、現在でも当時と同じ祭神があることを指摘した。

次に『道教・民間信仰における元帥神の変容』(関西大学出版部)を出版し、宋代に興起した雷法運動と、道教と民間信仰での元帥神と呼ばれる武神の祭祀について論じた。閩帝や趙公明・王靈官などの現在ポピュラーな神々は、そもそも元帥神から発展していったものである。また華光のように、信仰が衰えていったものもある。これらの信仰の推移は、現在の神信仰にも大きな影響を与えるものである。

「伽藍神としての祠山張大帝」など、一連の伽藍神に関する発表などでは、日本の禅宗寺院における道教神の像について、泉涌寺・建長寺などに祀られる祠山張大帝、相国寺・永平寺などに祀られる招宝

七郎神などを中心に論じた。なお、萬福寺における華光大帝なども、同様に伽藍菩薩として祭祀されるものである。これらの神々は、いずれも中国本土での信仰は衰退し、特に七郎神などは、ほとんどといってよいほど信仰の痕跡が残っていない。

泊園記念会・関西大学東西文化研究所の共催による第46回泊園記念講座「東と西その10」においては、「中国の神さま—道教・仏教・民間信仰の世界—」との題名で講演を行った。これは道教や仏教と民間信仰、さらに儒教に基づく習俗などを一般向けに平易な内容で解説したものである。

清朝における典礼問題および導入された西洋科学思想の作用と反作用

Rites Controversy in the Qing Dynasty and the Action and Reaction of European Scientific Knowledge

橋本 敬造

いわゆる典礼問題Rites Controversyの起源は、マテオ=リッチ(利瑪竇、1552-1610)の中國社會への應化Accommodationないし適應Adaptation策に由来するとされている。ここにいう典礼とは孔子崇拜や祖先崇拜、およびその儀禮のことであるが、キリスト教の宣教をめぐるイエズス會とドミニコ會・フランシスコ派などの會派とのあいだの、特に儒教典礼をどのように位置づけるかをめぐる論争と會派間の抗争が最高潮に達する、1704、1715、1742年と、ローマ教皇庁が中國の典礼に對する非難の教書を發するときまでの動きを、まず簡単に振り返った。その結果として、中國におけるイエズス會の解散命令の發布(1773年)、および清朝におけるキリスト教布教の禁止令に連繫するこの問題の展開があるが、ここでは問題の核心をなす儒教的の典礼がどのように議論され、理解されていったのかという点についても考察を行った。1939年になって教皇廳がこの18世紀に出した教書を見直すことになったということも、また興味がある問題ではあるが、今回の考察からは除外した。しかし、何よりもこの問題を含む文化の受容の結びつきのなかにおいて中國にヨーロッパからの數學や天文學や、その他の、一般的な科學や技術が導入されたという特徴的な状況の中

國的展開を見ることができるのである。本研究課題の最終的な目的はそうした文化的状況のあり方を典禮問題に関連づけることにあった。この関連において宣教師がもたらした西洋天文学の知識が清朝の暦法『時憲曆』にそれをめぐって生じたキリスト教の教義と中国の儀礼等との矛盾について考察を開始したこともこの課題への取組の特徴である。

朝鮮陽明学派の研究

A Study on Chosen Yang-ming School

中 純夫

平成17年度は、まず4月30日(土)～5月2日(月)の日程でソウルにて研究出張を行った。5月1日には宗廟大祭を参観、5月2日には成均館大学校を訪問した。また9月24日(土)から27日(火)までの日程で台湾中央研究院中国文哲研究所(台北市)を訪問し、9月26日(月)には同研究所にて学術講演会を行った。演題は「論鄭寅普著『陽明学演論』「朝鮮陽明学派」—朝鮮陽明学研究的諸問題—」(中国語)である。10月21日には関西大学アジア文化交流研究センターにおいて、思想・儀礼研究班の第4回研究会の研究発表を行った。題目は「王守仁の文廟従祀問題～中国与朝鮮における陽明学観～」である。以上の活動に加えて17年度は主として(1)朝鮮陽明学研究史の整理と評価、(2)王守仁の文廟従祀問題、に関する研究に取り組んだ。

18年度は6月16日(金)東京大学において科研研究報告を行った。発表題目は「鄭齊斗『霞谷集』版本の諸問題」である。また8月28日(月)～30日(水)の日程で、高麗大学校及びソウル大学校奎章閣において資料の調査収集を行った。これらの活動に加えて18年度は、主に(1)張烈『王学質疑』における陽明学批判の論点について、(2)信齋李令翊と椒園李忠翊における陽明学受容の問題について、(3)鄭齊斗の後裔に関する基礎調査、といった研究に従事した。

総じて中国近世思想史と朝鮮近世思想史とを並行して研究している。

5 比較文化研究班

(主幹)野間 晴雄

(1) 班別研究報告書

システムとしての文化の比較文化研究

—大航海時代を中心としたヨーロッパとアジアの邂逅—

Comparative Cultural Research of as a System

—European and Asian Encounters Focused on the Age of Exploration—

アジアやアフリカに到達したヨーロッパ人との接触による変化を、広義のシステムとしての文化としてとらえ、その比較研究を、歴史地理学、イギリス法制史、アフリカ社会経済史、文化地理学、地図学を専門分野とする研究者で研究班を構成して、学際的に解明することを目的とする。

時間幅としては、狭義の大航海時代と、そのあとに続く18～19世紀までの植民地体制が深化する時代までも柔軟に含め、ダイナミックなグローバルヒストリーの確立をめざす。

個別研究としては以下のとおりである。野間はアラビア海、インド洋、南シナ海の港市ネットワークと港市の構造について現地調査を交えて論じた。北川はアフリカ大陸の東・西沿岸部を「異文化交流圏」として位置づけ、西アフリカ沿岸におけるヨーロッパとアフリカの邂逅について国内外での史料所在調査と分析を試みた。朝治は「大航海時代の日本とイギリス」として、16～17世紀の日英のあり方を文書学の観点も含めて考察する。橋本は台湾調査でこれまで収集した資料に加えて、17～18世紀のアジア東部へのヨーロッパ人進出による農耕への影響を論じた。三好唯義(委託研究員)は、大航海時代にアジア地域の地図作成に関与したスペイン、ポルトガル、オランダなどの地図情報の伝播流布と描かれた世界地図の地図学的考察を行った。

研究例会発表実績

◇平成17年度

12月16日(金)

野間 晴雄「比較文化研究班のねらい」

北川 勝彦「南アフリカの文書館訪問記」

朝治 啓三「イギリスから見たリターン号事件、

1673年」

◇平成18年度

11月10日(金)

北川 勝彦「インド洋におけるアフリカ人、アジア人及びヨーロッパ人の出会い—その予備的考察—」

野間 晴雄「アジア海域ネットワークと港市の生成・展開・衰退—東西ユーラシア海という類型についての予察—」

刊 行 物

☆『東西学術研究所紀要』第38輯，平成17年4月1日刊行

野間 晴雄「18世紀後半英領インドにおける地図作製事業とレネルー「帝国」と地図のポリティクス(1)―」

☆『東西学術研究所紀要』第39輯，平成18年4月1日刊行

朝治 啓三「リターン号事件と十七世紀後半の国際関係」

Tran Anh Tuan “An Analysis on the Land Reclamation process of Tien Hai District, Thai Binh Province, Vietnam in 19th century”

☆『東西学術研究所々報』第80号，平成18年4月30日発行

橋本 征治「巻頭言 新たな出発にあたって」

その他の活動

1. 2006年1月31日～2月1日(神戸市立博物館，六甲荘) 合宿研究会

神戸市立博物館で三好唯義委託研究員の案内で館所蔵の大航海時代の次の古地図18件を全員で熟覧した。ミュンスター世界図(16世紀中頃)，カルデル世界図(1550?)，オルテリウス世界図(1587)，ブトレマイオス世界図(1605)，ブラウ世界図(1635)，ブラウ世界図(1635)，ティセラ日本図(1595)，東アジア図(1552)，東インド諸島図(1570)，タルタリア図(1570)，中国図(1584)，カスタルディ西半球図(1550?)，ミュンスター新大陸図(1550年頃)，オルテリウス太平洋図(1589)，シルヴァヌス編ブトレマイオス地図帳(1511)，オルテリウス『世界の舞台』(1570)，リンスホーテン東インド地域図(1596)，ペハイム地球儀複製(1492)。

さらに研究会では，朝治啓三「一七世紀の英国と

日本—文化の相互影響について—」発表，野間晴雄「フィリピンにおける文化接触の一断面—イフガオ族の棚田とバギオで考えたこと—」，寺尾直貴「イングランドへのノルマン人の定着とイングランド人」，橋本征治「サツマイモの伝播と大航海時代」の発表があった。

2. 研究班としての外部資金

日本学術振興会・萌芽研究「イギリス東インド会社とアジア・アフリカの邂逅をめぐる文化システムの研究」(研究代表者・野間晴雄，課題番号17652069)で，北川は南アフリカでの史料調査，朝治は国際学会での成果発表(オーストラリア，アメリカ合衆国)，野間は研究打合せ(ラオス)に外国出張した。また，東西学術研究所主催シンポジウムの開催費用の一部に充当した。

また，平成17年5月30日には浅田實(創価大学名誉教授)「東インド会社—その歴史と話題」の話題提供を東西学術研究所で受けた。

3. 東西学術研究所主催シンポジウム「アジア・世界をつなぐ海の回廊—文化の出会い—」

平成19年1月19日(金)～20日(土)に東西学術研究所主催(人文地理学会協賛)でのシンポジウムを開催した。この全体の構想はわれわれ比較文化班と世界習俗班が中心となった。われわれに関連する発表としては，基調講演の生田滋(大東文化大学名誉教授)「ヨーロッパ人にとってのアジア，アジアにとってのヨーロッパ人—大航海時代を新しい視点から見る」が行われた。さらに以下の関連する研究発表を行った。

第1セッション：アジアと世界の出会い—大航海時代を中心として—

野間 晴雄「アジア海域ネットワークと港市—生成・展開・衰退の東と西—」

朝治 啓三「英船リターン号の事件(1673年)とオランダ東インド会社の対日交渉」

北川 勝彦「インド洋におけるアフリカ人，アジア人およびヨーロッパ人の出会い」

三好 唯義「ヨーロッパ製掛地図と日本製地図屏風」

ラタン・ラル チャクラボルティ(元ダッカ大学教授・科研研究協力者)「インドにおける東イ

清朝と日本、および英国の対応の違いを考慮に入れて考察すべきことを、第1次の結論とした。これを研究例会で報告し、後に『紀要』39号に掲載した。さらに二年度目には東西研シンポジウムのため、史料調査を継続し、大英図書館所蔵史料に基づき、英国商社と政府が、アジアへの英国産毛織物の販売計画に挫折し、一八世紀初め以降は、対日貿易よりもアジア全体に対する貿易構造のなかで、清朝との国交を捉えていたことを第2次の結論とした。その成果は近く『紀要』40号に掲載予定である。

大航海時代におけるアジアとヨーロッパの邂逅

—ヨーロッパとアジアに生きたアフリカ人—

Asians Encounter with Europeans in the Age of Discoveries
with special reference to African Diasporas

北川 勝彦

本共同研究では、研究分担者は、当該時期のヨーロッパ、アフリカおよびアジアにおけるアフリカ人とヨーロッパ人の遭遇と交流の諸相—思想、通商、文化—を考察する。研究分担者の主たる役割は、ヨーロッパとアジアの邂逅の歴史的展開にアフリカという要因がどのようにかかわってくるかを検討することで、ヨーロッパ—アジア関係史の理解を進展させるところにある。

平成17年度には、9月3日から17日にかけて本共同研究のテーマにかかわる資料調査のために南アフリカ共和国に赴いた。今回訪問した文書館は、ケープタウン大学のアフリカ研究図書館(African Studies Library, University of Cape Town)、南アフリカ国立文書館のケープ文書館(Cape Archives, National Archives of South Africa)およびクワズールー・ナタール大学のキリー・キャンベル・アフリカーナ図書館(Killy Campbell Africana Library)の3箇所であった。この成果は、平成17年12月16日の東西学術研究所第4回研究例会(比較文化研究班)において「南アフリカの文書館訪問記」として報告した。また、平成18年度には、11月10日に児島惟謙館で行われた研究所例会(比較文化研究班)において「インド洋におけるアフリカ人、アジア人およびヨーロッパ人の出会い—その予備的考察—」と題して、大

航海時代におけるアフリカ人のアジアへの移動に関する諸研究をサーベイした報告を行った。本報告は、平成19年1月19日、20日に行われた東西学術研究所主催の国際シンポジウムの予備報告である。なお、平成17年度および18年度の研究を通して、これまでアフリカ人の移動の研究が大西洋を舞台とするものが主であったが、インド洋、ひろくは海洋アジアへの移動の実態が明らかにされ、最近、しばしば論じられるようになった「ディアスポラ現象」を理解する枠組みの精緻化に一定の貢献が可能であることが示された。

外来作物導入と根栽農耕システムへの

影響に関する比較研究

A Comparative Study of Introduction of the Immigrant Crops and
Influence to the Farming System of Vegetative Planting Crops

橋本 征治

平成17年度から19年度と、3年間にわたる科学研究費補助金、基盤研究(C)「黒潮ルートのイモ栽培文化—琉球弧の島々と台湾—」の交付を受けて、本研究班での個別研究活動「外来作物導入と根栽農耕システムへの影響に関する比較研究」を実施するための資金的な裏付けをうることができ、それに基づいて研究活動を計画し、実施した。まず、平成17年度においては、従来から継続的に実施してきた南西諸島、特に沖縄の根栽農耕に関する調査研究を引き続きおこなうとともに、新たにサツマイモ等の外来作物に関する資料収集も行った。新たな展開として、前年度から準備を進め、すでに2回にわたって予備調査を行ってきた台湾の本格的な調査・研究活動に取り組んだ。8月には研究協力者とともに台湾調査を実施した。すなわち、台北・台東・高雄で資料と文献の収集をおこなうとともに蘭嶼での現地調査を行い、多くの成果をあげることができた。18年2月にはフィリピンを研究の視野に入れるため、フィリピン、マニラでの文献・資料収集とマウンテン州での現地調査をおこない、研究の基礎を固めることができた。

18年度は引き続きフィリピン(2回)、沖縄での資料収集と現地調査を行い、研究の深化に努めた。

特に、懸案であったフィリピンのバタン諸島調査の目処が立ち、実施する運びとなった。ここでは根拠農耕に関する研究とサツマイモ等の外来作物の導入についても研究をおこなう。

これらの成果の一端を、東西学術研究所主催のシンポジウム「アジア・世界をつなぐ海の回廊—文化の出会い—」において、「タロイモの栽培と伝播—日本・台湾・フィリピンの文化邂逅—」と題して発表した。

ヨーロッパ製世界地図と日本製地図屏風

European World Maps and Japanese Folding Screen Maps

三好 唯義

16世紀末期～17世紀前半における日本人絵師が描いた地図屏風は、東西文化交流の結晶ともいべきものである。特に、現在は宮内庁三の丸尚蔵館に保管される『万国絵図屏風』は、原本となったヨーロッパ製世界地図も判明しており、日本側への受容と変容の過程が考察できる。

以前よりこの屏風に注目していたが、今回あらためて整理しなおしてみた。まず原図となった1609年版カエリウス世界図は現存しないため、その前後の世界地図を用いて復元を試みた。次に、その図から生み出された三屏風（宮内庁図、香雪美術館図、神戸市立博物館図）を比較する。

その結果、最も原本の姿をとどめるもの、つまり受容成果としては宮内庁図が最も優れており、香雪美術館図・神戸市立博物館図の順に劣ってゆく。このことは、描かれた時代の違いも意味していると思われる。次に変容部分を挙げれば、日本列島および周辺地域の描写が、ヨーロッパ製原図よりも優れていることに注目した。その主体者は、洋風画技法の習得と世界地理の知識などから考えても、イエズス会ならびにポルトガル人の関与が考えられる。日本列島内に印された都市マークからは駿府が特定でき、徳川家康との関連が想定され、彼が見たと史料に記されている南蛮世界図屏風が、宮内庁図であることの蓋然性はかなり高まったと思われる。

いずれにしても、ヨーロッパ製壁掛け地図が大きな役割を果たしていることは明確で、それがどのよ

うなルートでもたらされ、どのように受容され変容してゆくのか、さらなる考察の必要性を感じた。

6 世界習俗研究班 (主幹) 浜本 隆志

(1) 班別研究報告書

「通過儀礼」比較研究

Comparative Studies on Rites of Passage

われわれの研究班では、17年～18年度の研究例会において、下にも記したが、熊野建が「イフガオ族におけるフィエスタ：農耕儀礼と儀礼の遊び、その変容」を、浜本隆志が「聖ニコラウス祭と秋田のナマハゲー—ヨーロッパと日本の冬至祭—」というテーマで発表した。なお大島薫は平安時代の儀礼研究を、森貴史は18世紀の南太平洋の習俗の研究を継続した。

次にわれわれの研究班として、平成19年1月19日～20日に開催された東西学術研究所シンポジウムにも参加し、おもに第3セッション「食文化を通してみたアジア・世界の出会い」を担当した。個別の発表は以下の通りである。

- 浜本隆志 マイセン磁器と食文化
—景德鎮・伊万里・マイセン—
- 熊野 建 食をとおしてみたフィリピン：
低地社会と山地社会との比較
- 大島 薫 宗教が運んだ食文化
—アジアから日本へ—
- 森 貴史 クックがみたタヒチの食と儀礼

なお、この発表については、現在、各自が活字化の作業をしているところである。個別研究については各研究員が提出した報告書に記載されているが、本研究班のテーマとかかわるものとして、

- 浜本隆志 「図像で読み解く魔女の世界(4)-(6)」 関大生協『書評』平成17年4月～18年9月
- 『モノが語るドイツ精神』（単著）新潮社 平成17年
- 熊野 建 「北部ルソン島イフガオ族の伝統的シャーマニズム再考」 関西大学『社会学部

紀要]平成18年10月

森 貴史『中世ヨーロッパ放浪芸人の文化史 し
いたげられし楽師たち』(共訳)明石
書店 平成18年

Zwischen Mensch und Affe.
Anthropologische Aspekte in Forsters
Reise um die Welt. Georg-Forster-
Gesellschaft, Germany, 2006.

などがある。なお準研究員の溝井裕一は、『飲み込
む籠』と通過儀礼—ヨーロッパの図像における「死
と再生」の概念について—を東西学術研究所紀要、
平成17年に掲載した。

研究例会発表実績

☆平成17年12月16日

熊野 建「イフガオ族におけるフィエスタ：
農耕儀礼と儀礼的遊び、その変容」

☆平成18年12月15日

浜本 隆志「聖ニコラウス祭と秋田のナマハゲ
—ヨーロッパと日本の冬至祭—」

その他

われわれの研究班は、科研費の萌芽研究を取得し
ているが、班内の合宿、研究会以外に、平成17年度
は、熊野建、浜本隆志(関西大学調査研究員)がド
イツ、オーストリアを中心に、クリスマス、カーニ
ヴァルなどの冬の習俗を現地調査した。

平成18年度では、研究班の熊野建、大島薫、浜本
隆志が宮崎県の椎葉村に行き、仮面の習俗と神楽を
調査した。さらに秋田の男鹿半島にてナマハゲの習
俗を、八幡平では神楽の習俗をあわせて調査した。

(2) 個別研究報告書

ヨーロッパと日本の通過儀礼

On Rites of Passage in Europe and Japan.

浜本 隆志

中部ヨーロッパにおける聖ニコラウス祭(12月6
日)の習俗を、日本の秋田のナマハゲの習俗とのか
かりから、フィールドワークを通じて比較研究し
た。その1部を前述の研究例会で発表した。重複す
る部分もあるが、研究概要を以下にまとめておきた
い。

まず聖ニコラウス祭では、クランプスという仮面
の怪物が重要な役割をはたしているが、これは聖ニ
コラウス祭の前日(12月5日)の夜、家へあられ、
おりこうにしている子供には褒美を与え、悪い子供
にはムチで制裁を与える儀礼をおこなう。クランプ
スの習俗のうち、褒美を与える部分のみが継承さ
れ、後のサンタクロースの習俗が生まれた。

他方、秋田のナマハゲも大晦日に鬼の仮面をつけ
て家へ上がりこみ、怠け者に制裁を与え、家には福
をさずける。この中部ヨーロッパと日本の習俗は、
直接、文化交流がなかったにもかかわらず、きわめ
て類似したものであるが、その理由を日本では秋田
だけでなく、岩手、鹿児島、沖縄の各地に残る正月
行事と、ロシア、ルーマニア、ラトヴィア、中国な
どのクリスマスや新年の行事に拡大して比較研究し
た。その結果、類似した怪物や鬼は、子孫のもとへ
年の変わり目に出現する先祖霊をあらわし、かつて
ユーラシア大陸で古層の文化においておこなわれて
いた新年の祭りの残滓であることが明らかとなっ
た。

この研究と並行して、ヨーロッパにおけるマイセ
ン磁器と食文化とのかかわりについても考察し、シ
ンポジウム報告をおこなった。

東南アジアの通過儀礼

On Rites of Passage in Southeast Asia.

熊野 建

フィリピン、ルソン島、イフガオ族をとりあげ、
儀礼を司る宗教的祭司の文化的な位置を再考した。
男性優位の傾向が強いキリスト教を受け入れなが
ら、女性の文化的な優位性が顕著なフィリピン社会
にあって、フィリピン諸民族とは異なり、イフガオ
族は宗教的に男性が優位を占めていると考えられて
きた。つまりイフガオ族において、女性が宗教的役
割から排除されているという理解に立つ研究が多い
なか、人類学的な文献ならびにフィールド調査から
のデータを精査した結果、イフガオ族においても、
周知的ではあるにせよ、女性が宗教的な機能を保持
している状況が認められる、との知見を得るにいた
った。これらは狩猟、首狩り慣行、農耕それぞれの

場における性別役割の差異について研究したロザルドゥらが、イフガオ族を男性優位として構築したモデルへの批判に立つものである。

次に儀礼食のあり方、特異性に注目してきたが、日常的な食事との連続性と不連続性、フィリピンにおける食材、調理方法などが他のアジア地域との関連性を確認し、シンポジウムで報告した。

最後に、ヨーロッパのカーニバル空間と日本の民俗における儀礼空間を比較する機会を得ることができ、性別分業、儀礼的な食事のあり方などを検討している段階である。

〈総合課題〉

南太平洋諸島の食習俗をめぐる研究

A Study on the Dietary Practices in the South Pacific Islands

ヨーロッパ初期文化人類学の分析

An Analysis of the Perspectives Found
in Early European Anthropology.

森 貴史

これまでも18世紀後半におけるヨーロッパ人による南太平洋諸島への航海を記した航海記の研究を続けてきたが、平成18年度には、とくにヨーロッパの自然研究者や航海指導者たちがポリネシアの住民の習俗を観察する視点を分析した。レヴィ=ストロースの研究を基礎にして分析することで、当時のヨーロッパの世界観や時間概念がもっている問題性を明らかにすることができた。この内容は東西学術研究所の国際シンポジウムで発表した。

また、ヨーロッパ近代の航海記および紀行文学に関連する文献を収集する過程で、ヨーロッパ中世における文化交流、紀行文学、キリスト教を調査していたが、とくに興味深い文献であると思われたマルギット・パツハフィッシャーの*Musikanten, Gaukler und Vaganten* (Augsburg, Battenberg, 1998)を『中世ヨーロッパ放浪芸人の文化史 しいたげられし楽師たち』というタイトルで明石書店から共訳で出版した。

くわえて、ゲオルク・フォルスターをめぐる研究についても、いくつかの成果があった。フォルスタ

ーのタヒチを中心とした自然描写の問題および人類学的な記述に関する研究の一部も、日本独文学会から学会叢書として出版したり、ゲオルク・フォルスター・ゲゼルシャフトの学会誌に掲載された。

7 言語接触・語彙交流研究班

(主幹) 内田 慶市

(1) 班別研究報告書

近代における中・日・欧の言語接触と 語彙交流に関する研究

Studies on language contacts and
vocabulary exchanges between China, Japan and West

本研究班では、近代の「西学東漸」の潮流の中における東西（日本、中国、そして欧米）の言語文化接触に関わる様々な現象のうち、特に、言語に関する問題を中心に取り扱ってきた。

各メンバーは、それぞれの自分の専門分野（内田は欧米人の中国語研究、沈と荒川は日中の語彙交流、奥村は日本における「唐話」）における個別的研究を進めると共に、同時にそれらの個別的研究を班全体として「総合」という方向も模索してきた。つまり、ある共通のテーマについてそれぞれの専門分野からの意見を総合し、新しい「東西言語文化研究」を構築するという考え方である。そしてその一つの成果が、国際シンポジウムの報告集である「19世紀中国語の諸相」である。科学研究費のテーマも同様であり、そこでは、さらに、ヨーロッパ学の専門家と朝鮮資料の専門家もその研究分担者に加えてある。

本研究班による「東西言語文化研究」は現在の世界におけるこの分野の研究をリードするものであり、各メンバーの今後いっそうの研鑽による研究の深化が期待されているものである。

なお、各メンバーの個別の研究成果については、各人の研究報告を参照されたい。

研究例会発表実績

☆平成17年12月2日

内田 慶市「近代ヨーロッパ人の中国語研究の

「官話」研究上での位置付けとその可能性」

奥村佳代子「『唐話使用』とその周辺」

沈 国 威「日本の蘭学と近代漢語の形成」

荒川 清秀「『電』のつくことば—『電話』を中心に」

☆平成19年2月10日

奥村佳代子「唐話資料に見られる中国語に対する意識について」

刊 行 物

☆平成18年度

東西学術研究所研究叢刊28

奥村佳代子著『江戸時代における唐話の基礎的研究』

☆平成19年度

内田慶市

沈 国 威 編

『19世紀中国語の諸相—周縁資料(欧米・日本・琉球・朝鮮)からのアプローチ』(関西大学アジア文化交流研究叢刊第1輯、雄勝堂出版)

その他

平成18年度科学研究費基盤研究(B)一般「19世紀『官話』の諸相—『周縁(ヨーロッパ・朝鮮・琉球・日本)』からのアプローチ」(研究代表者:内田慶市、¥12,000,000)

(2) 個別研究報告書

西洋人の中国語研究と中国における西洋文法学の受容

Western linguistic study on Chinese,
and Chinese acceptance of Western linguistics

内田 慶市

近代における西洋人の中国語研究は、(1)西洋には早くから言語学・文法学という学問領域が確立していたこと、(2)彼の国(中国)と此の国(西洋)との言語の違いに着目し、彼らにとっては自明の事柄であっても、それらを自分の言語と対照することによって、彼の国の言語の特徴を浮かび上がらせることができたこと、(3)キリスト教の布教という大前提の下に、彼の国の言語・文化を我がものとしてとらえようとしたこと、といった点において、中国語学研究において極めて有益である。特に、文法学においては、中国人の手になる体系的な文法研究は清末

(1898)まで存在しなかったのに対し、西洋ではすでに16世紀後半には中国語文法書が出現しており、それらの系譜をたどり、それらが中国人の文法研究に与えた影響を考えることは、中国語文法研究にとって必要不可欠のことである。このような観点に立って、近代の西洋人の文法研究について、基本的な文献を取り上げ、その成果を内外の研究雑誌や国際シンポジウムにおいて発表した。おそらくこの分野の研究においては、世界をリードしているものと自負している。

漢字語の交流：日本語→中国語

Exchange of Chinese character (Kanji) words:
from Japanese to Chinese

沈 国 威

平成17年度は、引き続き西洋の新概念を表す漢字語が如何に日本で作られ、そして中国へ伝わり、漢字文化圏における共通したタームとなったのかという問題意識の下で研究を続けてきた。

シンポジウムでの研究発表「蘭学の訳語と近代新漢語の形成」は、蘭学訳語の制作プロセスを詳細に分析し、蘭学者たちはどのように漢籍語の尊重から脱皮し、自ら新訳語を作ったのか、その造語法上の特徴は如何なるものかを論じた。特に来華した西洋宣教師らの造語法と比較した場合、その優劣と近代語彙体系の形成への影響を論じた。本稿は、中国の学術雑誌『中国学術』に採用された。

研究発表「近代日本書中譯之濫觴—黄遵憲的『日本国志』“刑法志”は中国人による最初の本格的な日本書中国語訳を考察したものである。日中の文化的接触は、有史以前に遡れるが、日本書の翻訳に着手したのが明治期に入ってからのものである。つまりそれまで日本から知識、情報の受け入れは文献上行われなかったのである。本発表は、翻訳の周辺の事情、翻訳法、到達度などについて分析を行った。特に漢字語の存在と翻訳の可能性と誤読性に着目し、問題の本質に迫った。

上海復旦大学の国際シンポジウムでの発表：「西洋新概念逆流の道程—近代日中語彙交流を例として」は、近代の西洋知識がいつから日本経由で中国

に入ったかを論じたものである。

上記のような問題意識の下で、個別事案の研究も進めてきた。「保険」という語の形成と日中間の交流をクローズアップした。

このように大きな流れを捉えながら、個別事例による検証も怠らずに考察を進めていくのがわたしの手法であり、もっと深く掘り下げて研究を重ねていく所存である。

江戸時代における唐話の諸相と伝播について

Variation and propagation of Chinese in Edo period

- (1) 岡島冠山の唐話資料について
Studies on Chinese by Okajima Kanzan
- (2) 長崎唐通事の唐話資料について
Studies on Chinese in Nagasaki Kara Tuji
- (3) 個別の資料に見られる唐話に対する認識の相違について
Different awareness on Chinese shown in individual material

奥村佳代子

○『江戸時代の唐話に関する基礎研究』単著

関西大学東西学術研究所研究叢刊28

関西大学出版部 369ページ

岡島冠山は、長崎唐通事としての経験と荻生徂徠のグループに出入りし唐話を教えたという経験を生かし、『唐話纂要』『唐訳便覧』などを編纂、著し、唐話を記述した。『唐話纂要』は、出版された最初の唐話書であり、個人の名が冠せられた資料としては量的にも群を抜いている。

江戸時代の唐話は語学的に単一の性質のものではなく、担い手が唐通事（現役の唐通事、中国をルーツとする）であるか、唐通事でないか（元唐通事、中国をルーツとしない日本人唐通事）という点と、受け手が長崎の唐通事か、唐通事ではない日本人かという点によって、その実態は異なる。岡島冠山によって制作された唐話資料は、担い手（岡島冠山）が元唐通事の日本人であり、読み手が唐通事ではない日本人であった。その唐話は初めて公に日本人の目に触れた唐話である。まさに、唐話を担い手と受け手によって二分類した場合の中間の存在であると

言うことが可能であり、中国語学の立場からの分析は、江戸時代全体を通じての唐話の性質を考える上で、欠かせない基礎的な作業であると言えるだろう。本書では、唐話を分析することによって、冠山資料の特徴のひとつである多様性と、唐通事の唐話資料の均質性を指摘した。

日中共通の漢語の歴史的研究

A Historical Study of the Compounds in Japanese and Chinese written with the same Chinese characters

日中漢語語基の比較

A Comparative Study of Chinese-derived Morphemes in Japanese and Morphemes in Chinese

荒川 清秀

○「電」のつくことば—「電話」を中心に—単著

『19世紀中国語の諸相』所収 雄松堂出版 p263

～282 2007年3月

「電」のつくことばは「電気」「電車」「電信」等日中で共通のものが多く、そのほとんどは中国で先につくられている。しかし、「電話」はその誕生がおそかったことと、音訳語である「徳律風」が中国（主に上海）で好まれたため、日本製の「電話」はなかなか中国語の中へ入っていかなかった。本稿は「電話」が「電気通話」等の略称として生まれたことと、それがいつごろ生まれ中国語の中へはいついったかを多くの資料から考証した。

○「日中両国語における漢語語基の意味と造語力」

『日中対照言語学研究論文集—中国語からみた日本語の特徴、日本語からみた中国語の特徴』所収 和泉書院 p1-18 単著 2007年3月

日中同形語の研究はこれまで多くの蓄積があるが、同形語を構成する語基の意味や造語力についての研究はまだ乏しい。本稿では両国語の語基の意味はなにによってささえられているのか、その違いはなにかを多くの例によって示した。

8 文学と異文化接触研究班

(主幹) 和田 葉子

(1) 班別研究報告書

文学における異文化接触

—衝突・融合・共生の諸形態

'Cross-cultural contacts in western European literature
as expressed through conflict, fusion and symbiosis'

フランスが及ぼした影響に焦点を合わせ、西欧における異文化接触の研究を行った。扱った地域はラテンアメリカ、ドイツ、イギリスである。文学研究は従来、テキストのみがその対象となりがちであるが、本研究では、テキストが書かれた当時の時代と社会について調査を行い、それらを背景とした異文化の影響を考察した。その成果は2度の研究例会において発表した。

平田研究員は「ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ：人と作品」をテーマに、質・量ともに並外れた作品を遺したにもかかわらず、本国のみならず、日本をはじめ外国においても正当な評価を受けなかった、ラモン（1888-1963）の再評価を行った。本邦初訳の『グレゲリーア抄』（平成19年 関西大学出版部）はその結実である。八亀研究員はバルト・ドイツ詩人J.レンツと René Schickele の場合をとりあげ、それぞれの作家がフランスとの異文化接触がその作品にどのように表れているかを示した。和田研究員は13世紀初期に中英語で書かれた *Ancrene Wisse*（修道女の手引き）のフランス語の借用語について、また、その人生が異文化接触そのものである William Caxton（c 1422-1492）の翻訳と出版活動について考察した。

研究例会発表実績

☆平成18年1月20日

総合テーマ 西洋における異文化接触

—フランスの及ぼした影響

平田 渡「ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナの再評価をめざして」

八亀 徳也「バルト・ドイツ詩人J.レンツとフランス・アルザス」

和田 葉子「中英語とフランス語の接触と共生

—*Ancrene Wisse* の場合」

☆平成19年1月26日

平田 渡「ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ（1888-1963）『乳房抄』（1917）について」

八亀 徳也「独仏文化のはざままで —René Schickele の場合」

和田 葉子「どの言語で書くべきか：中世英国におけるフランス語・英語・標準語の状況について」

刊行物

☆平成17年度

東西学術研究所紀要 第39輯

平田 渡著「ラモンの再評価をめざして」

関西大学文学論集 第54巻第3号

八亀 徳也「J. M. R. レンツ受容史覚え書 —後世詩人による再生の観点から—」

東西学術研究所紀要 第38輯

和田 葉子「魔女の手に渡った *Ancrene Wisse* —London, British Library, MS. Cotton Vitellius F. vii の所有者についての一考察」

☆平成18年度

東西学術研究所 訳注シリーズ 11

平田 渡著『グレゲリーア新抄』

東西学術研究所紀要 第40輯

八亀 徳也「アルザスのJ.レンツ—とくに「ドイツ協会」との関連において—」

Neo-ANGLICA vol. 4和田 葉子「*OED*に見る英語散文の連続性について」

東西学術研究所 資料集刊 20-2

David N. Dunmville 著 *Palaeographer's Review* vol.2

その他

平成18年3月27日(月)～28日(火)、高槻キャンパス高岳館にて合宿を行い、17年度のまとめと18年度に向けての方針を議論した。また18年度、和田研究員が受け入れる招聘研究員、米国ノース・カロライナ大学のパトリック・オニール教授の研究計画について

て話し合った。

(2) 個別研究報告書

中世写本に見られる異文化共生

Manuscripts and multi-lingual situations in medieval England

和田 葉子

13~15世紀に英語とフランス語あるいはラテン語で書かれたテキストが共に書かれている写本の作者、読者、使用者、編纂者について調査することにより、中世後期のイギリスの言語事情を明らかにすることが目的である。2言語あるいは3言語のテキストが収められている写本は、通常、それぞれ単独の作品として、各言語の分野で研究されてきた。今回は、それらが同時に現れる写本全体を研究対象として、中世のイギリスにおける言語と社会の状況を考察するという試みである。夏にはイギリスのケンブリッジ大学図書館で写本調査を行いながら、日本では入手が困難な資料をコピーし、国内でも研究が続けられるようにした。ケンブリッジでは、中世の分野の学者たちと積極的に交流し、最近の研究について話し合った。

平成18年の秋にはアメリカのノース・カロライナ大学教授であるパトリック・オニール博士を招聘し、今回の研究についてディスカッションする機会を得ることができたのも大きな成果であった。また、12月には日本中世英語英文学会のシンポジウムのために来日したイギリスのサザンプトン大学のベラ・ミレット博士の発表に対するコメントを述べる機会に恵まれ、大いに刺激を受けた。

今回の調査の結果、アイルランドのウォーターフォード市立図書館に、中世の時代、英語、ラテン語、フランス語の3言語で書かれた郷土の歴史を記録した写本が残っていることがわかった。長期にわたる記録であるため、時代が進むにつれて、どのように言語の使用が変化したかを知る興味深い文献である。大英図書館が所蔵する3ヶ国語による写本との関係を考察する足がかりとなる重要な資料である。

西欧における異文化接触—フランスの及ぼした影響—

ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ 人と作品

French influence on contact with other culture in Europe
— personality and works of Ramon Gomez de la Serna

平田 渡

ラモン・ゴメス・デ・ラ・セルナ（一八八八～一九六三）は、質、量ともに並外れた作品を遺したすぐれたスペイン人作家である。けれども、本国のみならず、日本をはじめ外国においても正当な評価を受けなかった嫌いがある。

その原因をさぐるために、伝記的事実を洗い直すうち、亡命先のアルゼンチンから一時帰国したラモンが、フランコ側の知識人が催した歓迎会に出かけた事実を突きとめた。内戦後、共和派側でなければ文人にあらずといった、空気がスペインだけではなく世界中に漲っていたときに。ラモンのノンシャランな政治的姿勢が大きな災いを招いたことを指摘した。（「ラモンの再評価をめざして」参照）

また一方で、ラモンといえばグレゲリーア、グレゲリーアといえばラモンと言われ、ラモンの代名詞になっている短詩型の散文作品『グレゲリーア』の抄訳を試みた。わが国の俳諧を意識しながら書かれた、作品総数一万三千前後の中から、五百有余篇を選びすぎた。本邦初訳である。

現在、スペイン本国でラモン再評価の機運が高まっているが、それに呼応するかたちで、論文による研究発表と、翻訳による作品紹介を通して、ラモンを正当に評価し、その真骨頂をわが国びとに伝えることを試みている。

バルト・ドイツ詩人J. レンツとフランス

Baltic-German Poet J. Lenz and France

アルザスにおけるJ. レンツ

J. Lenz in Alsace

八亀 徳也

J. レンツが1771年春から1776年春までの5年間、生涯で最も生産的な創作活動を行なったアルザスという地域は、現在はフランスに属しているが、ドイ

ツにとっても何世紀にもわたり重要で宿命的な土地であった。アルザスにおけるレンツの活動を知る前に、この地方の歴史と言語事情を調べておく必要があった。

歴史的にはアルザスは、4世紀末に始まった民族大移動の結果、それまで定住していたケルト人やローマ人に代わって、ゲルマン人の一派であるアレマン人が住みつき現在にまで至るが、1648年に三十年戦争が終結すると、支配権は神聖ローマ帝国からフランス王国に移る。それ以降、この地の支配者は独仏の間でさらに4回交替する。その度毎に、ドイツ語の一方言であるアレマン語を日常語として使用する住民は、交互にドイツ語とフランス語を強制される。この傾向が強くなるのは、1789年のフランス革命後、革命政府がアルザスにフランス語を厳しく押し付けてからである。従って、レンツがストラスブールに来た当時は、ドイツ語もドイツ文化も大幅に許容されていた。しかしそれでも、フランス語優位の状況に変わりはなかった。

今回の研究では、以上の事情を踏まえた上で、レンツがストラスブールの教養人の集まりである「哲学と文芸の会」を「ドイツ協会」へと改組し、書記として「協会」をリードした経緯、および例会で行なった3回の講演で彼が強く訴えたドイツ語改革の必要性和「協会」の存在意義を確認することが出来た。